私を変えた「ボランティア活動」

小牧市立味岡中学校

「ボランティアって誰のため、そしてなぜ行うのだろう。」

中学校に入学し、「ジュニア奉仕団」の申し込み用紙を前にして私は考えていました。高校生の姉も中学生のときに入団していたことや、仲の良い友達も参加するというので「なんとなく」入ることにしました。そこで初めの疑問がわいたのです。

私はそれまでボランティア活動をしたことがありませんでした。中学生になっていざ入団となったときに、楽しいことばかりではなく面倒なこともあるかもしれないのに、なぜわざわざ自分の時間を削ってまでボランティア活動ができるのだろうと不思議に思えてきたのです。そこで、活動に参加してその答えを探そうと思いました。

一年生で初めて参加した活動は校区内清掃で、自分の担当は学校のグランドの草抜きでした。手は汚れるし、暑い日だったので汗だくにもなってきました。抜いても抜いても変わらないように見えるグランドに、つい手を休めてしまいそうになりました。でも、すぐ横では一緒に活動してくださるＰＴＡや地域の方々が黙々と草を抜いてくださっています。「ご自分たちが普段使われるグランドではないのに、どうしてここまで一生懸命に作業できるのだろう。」と思いました。同時に、休みたいと思って手を止めたことに気まずさを感じ、もっとしっかりやらなければと、草を時間いっぱい抜き続けました。終わると、途中で心が折れかけた私も達成感や満足感がありました、自分達のためにやってよかったと思いました。でも、地域の方々はどんな気持ちで活動されたのでしょうか。この時の私には考えてもよくわかりませんでした。

その後、生徒会活動で地域の方々と交流して、日頃の思いを伝え合う機会がありました。その方々は「自分たちは、味中生の生活が過ごしやすくなるようにと思って活動している。」と話されました。ふと、草抜きのことを思い出しました。あのとき、自分はボランティア活動と言いながら、自分の満足感しか感じていませんでしたが、地域の方々は私たちがグランドを使いやすいようにと願い、元気に活動する私たちの未来を想像しながら作業をしていてくれたのだと分かりました。ボランティアは「こうなってほしい」と願う「誰か」のために行うもので、そこに自分の時間を削ってまでする喜びがあるのです。

また、歳末助け合い募金をしたときには、ボランティア活動ならではの魅力がわかりました。それは初めて会う人とでもすぐに繋がれるということです。スーパーの前に立ち、大きな声で募金を呼びかけると、それに応じて小さな子どもさんから高齢者の方までたくさんの人達が協力してくださいました。困っている人を助けたいという気持ちと共に、募金活動をする私たちへの励ましも伝わってきました。見知らぬ人と繋がれて、こちらの心まで温かくなるという感覚は、やってみないとわからないものでした。

今日本では、六十五歳以上の高齢者が人口の四分の一余りを占め、施設などの支援不足があちこちで起き、さらに少子化で働き手の人口が減り、公的な支援の財源も不足しがちになっています。支援が受けられず貧困率が上がっていることも耳にします。みなさんは困っているのに助けてもらえないような街に住みたいと思うでしょうか。そんな街にしたくないけれど、個人の力で現状を変えていくのは難しいと思います。多くの人に働きかけて共感してもらうことでよりよい社会の方向に進めるのではないかと思います。ボランティア活動は現状を変えていく一つの助けになると思います。

三年間の「ジュニア奉仕団」の活動を通じて、誰がやってもいいことを、他でもない「自分」が行うものだと私は思うようになりました。現実には、草抜きでは恩恵だけを受けている人、募金では無関心な人も確かにいますが、善意は無理強いするものではありません。ただ、以前の私みたいにボランティアの目的や良さを知らないままだと行動はできないのかもしれません。周りの人に関心をもち、困っている人の存在を知り、その人達に思いを寄せ、行動につなげられる人が増えるといいなと私は思っています。

自分は今できることとして、身近な人をボランティアに誘っています。未来の社会を作っていくのは、私たち中学生なのです。